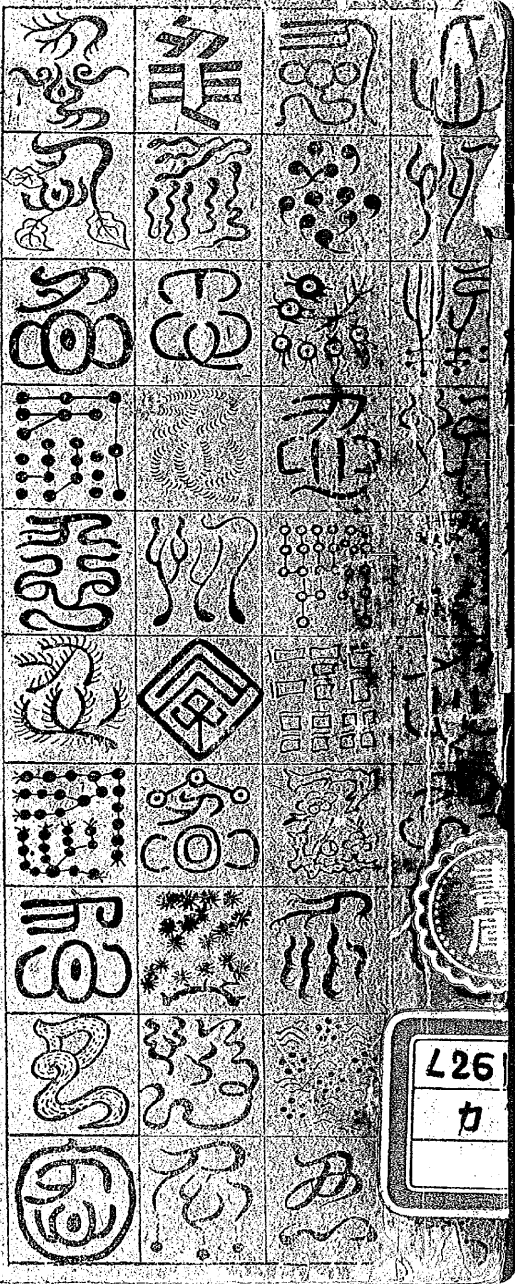


神田伯龍新講談  
忍城の水攻

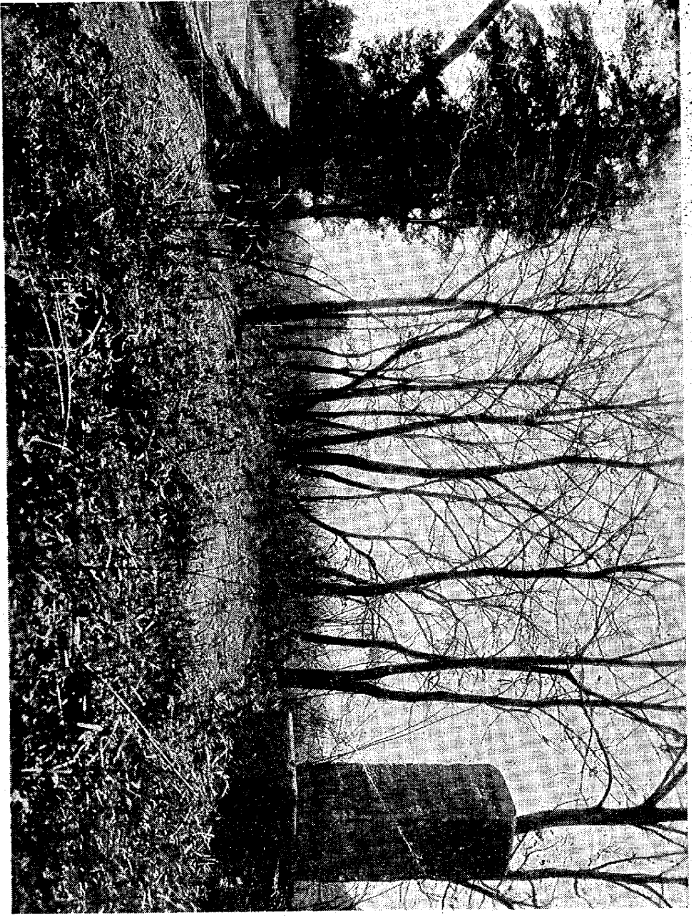


L26  
カ

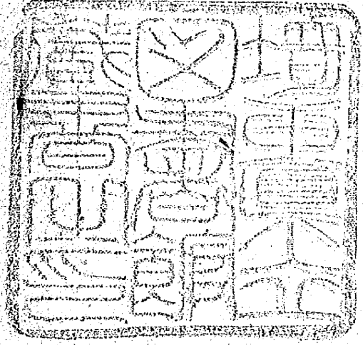


神田伯龍新講談

忍城の水攻



石田堤の遺跡（埼玉縣北埼玉郡下忍村堤根）



9954



行新田兵衛地蔵無縁塚に詣る  
 澤龍次郎氏と神田伯龍師

## 石田堤碑

凡耳目鼻口感動心志自為累矣事存口碑不如物存于  
 百也汗河之大堤使後之王公警駭奔西湖之蘇堤使後  
 之士庶慕風雅開常初天正十八年庚寅豐公東征軍于  
 相模建石田三成等城三成因舊堤築長圍利荒  
 三水灌之遂不能拔而去後宋堤漸圯廢存茲土云蓋  
 當時民居稀少不成邑可知矣乃今開墾盡地生齒蕃育  
 其誰賜子德澤之所決不可不感戴也增田豐純慮堤就  
 湮沒口碑從亡樹石表之其意蓋欲永使邑民望之感戴  
 德澤且多士目擊我龍和治也與世矜伐勒功虛說詭  
 者殊異焉靜軒居士喜而誌天正庚寅距于今茲慶應二  
 年丙寅凡二百七十七年

秋藤原輝書并  
 鈴木耕作鵜

石田堤の碑



無縁塚に発見せられたる楠氏後裔の墓石

## は し が き

神田伯龍師は、貞山・伯鶴と並び稱せらるゝ帝都釋界の第一人者であり、其の藝風は獨特の風格を有して、歴史・史實物に優れ、特に穩れたる美談を講談と云ふ大衆的の武器によつて世の中に數々を發表して、時局への貢獻顯著であります。

時に財團法人忍郷友會(埼玉県忍町に縁故を有する者により組織され、會員相互の親睦誼を計り、郷友子弟の育養を事業として、会長長に濱忍藩主子孫松平忠房閣下を戴く)にては、昭和十五年四月十四日例年東京に催される春季大會を十年振りにて郷土忍町に開催の事となり、會長樞密顧問官法學博士林頼三郎閣下より當日の餘興として伯龍師をとの話が出て、郷土出身の大澤龍次郎氏が當日忍町に伯龍師を帶道の事となりました。

斯くて忍町と伯龍師の關係が相生じ、其の間關東七名城の一として水攻めに名高き忍城の史實が話題に上り、更に忍町清善寺境内に昔日の忠勇士の無縁佛供養塔、それに因んで奉安されたる關東靈場として靈驗あらたかな行田新兵衛地藏尊に詣りずるに及んで、師の感銘は一段と深く、茲に『忍城の水攻』と題し行田新兵衛地藏尊の由來記に及ぶ新講談が伯龍師の手に依つて新作される事になりました。

此の話聞いたJOKKにては、之は面白いものであるとテストの結果、去る六月五日の夜伯龍師によつて天下に處女放送される事になり、マイクを通じて忍町の名聲が其の美談と共に一層高まるに及び、衆望によつて茲に一編と取纏めた次第であります

昭和十五年九月二十八日

編者誌

## 新講談 忍城の水攻

新講談、關東七名城の一である『忍城の水攻』を二席伺ひます。昔から有名なザレ唄に『伊勢は津で持ち、津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持つ』と云ふのがあります、此の替へ唄に誰が作ったのか、行田の足袋を読み込んで『忍の行田か、行田の忍か、忍は行田の足袋で持つ』うまい事が云つてあります。

此の忍町は、其の昔から葦荻がピツシリと茂つてゐた水郷で、常に鴛鴦が群り集つてゐた。其の鴛鴦のオシがなまつて地名となつたもの

二  
てありましようか、大字行田と共に、古くより足袋の産地として知られ、近くは時局下に、軍需被服の一切を製造し、産業殷賑を極めて發展の軌道に乗り、人口現在二萬五千、近く市制が施かれようとしてゐます。

忍が市になりましたら何と云ふ事になりましたようか。忍市（お獅子）どうもお正月のお獅子と云ふ様な事になつて誠に妙であり、又之を行田市と致しまししようか、

『オイ何處に行くんだい』

『行田市に』『何しに行くんだい』

『用達しに』『エ、』『行田市に用達しに』

之も誠にやゝつこしい譯であります。

扱て武藏野國北埼玉郡忍町は、其の昔關東の七名城、佐野の唐澤山、宇都宮、新田の金山、厩橋、佐竹の太田山、武藏の川越、それに此の忍城と共に七名城の一に稱へられ、中でも忍城は東を首とし西を尾とし、内郭、外曲輪とも、池や沼や或ひは深田を以つて固められた模範的の平城で、屢々大敵を引受け、しかも頑強に抵抗した華かな歴史を數々残しております。

中にも天文十二年、かの上杉謙信が北條と戦つた時、當時北條の幕下であつた忍の城主成田長泰を攻め、遂に要害と忍武士の強さの前に抜く事能はず、おもむろに後退したと云ふ事であります。

次は天正十八年、豊臣秀吉の有名なる小田原征伐でありまして、秀吉自ら之に當ると共に、小田原城を孤立させんがため、宛も蟹の手足を挽ぐ如く、關東に散在してゐた北條方の小城を片つ端より攻め落しましたが、忍城許りは實に小田原落城の後迄も尙ほ踏み堪へてゐたのであります。

即ち秀吉は五月の二十七日、石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉隆、長束大藏少輔正家等に命じ、佐竹義宜、宇都宮國綱、結城晴朝、水谷勝俊、多賀谷重經、佐野了伯等關東新附の諸將を率ひて、館林城を乗取り其の降兵を嚮導として總勢二萬三千餘名、川股の渡しを経て忍城にとぞヒシ／＼と攻め寄せて参りました。

時に忍城は、城主成田下總守氏長と、弟佐衛門泰親が小田原城に加勢に赴き、留守は氏長の妻太田氏（三樂の女）城代成田肥前守泰季、子長親、正木丹波守、酒巻鞆負尉等之を守り、防禦の方略を講じて、糧食其の他軍需品を蓄へ、農夫、町人、僧侶、神官に至る迄入城せしめて、士卒總勢二千六百餘人、緩急互に援助の計を定めて戦利あらば法螺貝を吹き、不利なる時は鐘を鳴して合圖となし、又婦女童子千餘人をして、旗を樹て、鼓を搥ち、大兵を擬せしむるなど、覺悟の程は並み大抵ではありませんでした。

扱て寄手は西北皿尾口には中江直澄、多賀谷重經、佐野了伯等五千餘人。東北長野口と北部北谷口には長束正家、結城晴朝、水谷勝



六  
俊等四千六百人。東南部佐間口には大谷吉繼、宇都宮國綱、南條因幡守等六千五百人。南部下忍口、及び大宮口には佐竹義直、北條氏勝等五千餘人。東南埼玉村には石田三成二千餘人、總計二萬三千餘人を以つて六月五日の朝まだき、先づ佐間、下忍、長野の三面より總攻撃の火ブタは切つて落されました。

されど當城は前申し上げた如く、模範的の平城にて、道は狭く其の左右に池や沼や深田を控へて大軍の進退に自由ならず、城兵は敵の近づくまで鳴りを潜めて待ち受けて、之を射撃し、ひるんで隊伍を亂すと見るや、城内より一舉に突き出て、何様四邊は泥沼の要害に、勝手知つたる細道を傳ひ、あの道この蔭と、寄手を慘々の目に合せました。

七  
寄手は手傷に、馬諸とも沼田に陥入り命を落す者數知れず、已むなく引上げて夜に入るや、彼のロビンフッドの様な勇敢なのが城中より小舟に打乗り、今回の歐洲大戦に見る落下傘部隊の如く、石田勢の背後にかゝつて火を放つて小荷駄を焼き、慘々に後方部隊を攪亂する。又或る夜はドツと計りに上方勢の陣中に突込み、陣幕、旗差物、馬標などを奪ひ取り、サツと猿の如く引上げ、夜が明けると分捕品の數々を城門に高々と掲げて『ヤア〜昨夜の夜討に分捕つたる旗、馬標に候へども、他人の紋所に候へば、當方には入用無之返上申す。欲しくば茲迄來つて持ち歸られよ。茲までおいで甘酒進

上……』とはめを叩いて打笑ふ程に、寄手の面々は齒ぎしりかんでくやしがる。

中にも紺地に『大一大萬大吉』と書かれた旗印が曝されてあるのを見て、寄手の大將石田三成『ありや俺の旗ではないか。まさか俺の旗が取られるなんてことはないだらう、大方代用品に違ひない』と調べさせた處正しく本物の純綿物と判り、烈火の如く憤り、高勢實乗のやうに『わしや、かなはんよう』といったかどうか、三成が此時城兵に大切な旗を奪はれた事は立派に文獻にのつてゐます。

後年三成が秀吉に『忍城攻めには實に閉口した。何しる地の利はよし、それに城兵の強い事、全く足袋以上だ』此の邊から忍(押し)

の強い人間と云ふのが始まつたらしい。

斯くて三成は到底力づくでは忍城は抜けずと見て、六月七日丸墓山に上つて遙に城郭を望み、其の地形が水攻めに便なるを認めて、堤を城外に築き、利根川と荒川の水をせき入れ、一舉に龍宮城たらしめんと案を建てる事になりました。

之が歴史に有名なる天下三大水攻めの一でありまして、高松城の水攻め、小田原城の水攻めと並び稱せられるのであります。尤も水攻めと申しましても、小田原城の水攻めは水の手を断ち切つたのであります。小田原は山城ですから水を断たれた城中の苦しみは察するに餘りある事で、今日東京市民が節水しながら時間給水をうけて

あるのでも解ります。皮肉にも秀吉は家臣に命じ、白米を山上から谷へ落させた、離れてゐる城中から見ると、之れがあだかも瀧のやうに見へるので、水に喝うてゐる城兵は「ア、瀧が、瀧が……」と咽の喉ごを搔かいて苦んだ。然して城兵の士氣しきを奪つたといふ話です。一方忍は平城ひらじょうですから、之には眞物の水で攻めた譯わけであります。

扱あつかて忍城を遠巻きにする一大堤防ていぼうは、丸墓山を起點として、南するものは埼玉、樋上、提根の三村を過ぎ、袋村の北にて西北に折れ鎌塚、門井、棚田、太井、戸出、平戸の諸村を経て熊谷附近の荒川に至り、北するものは長野、小見、白川戸の諸村を経て利根に至る其の長さは約三里半、高さは一丈乃至二間、幅は基脚で約六間と云

ふ大規模のものであります。

先づ第一に人夫の大募集が行はれ、勞銀は晝は一人に米一升と永錢六十文、夜は米一升到永錢百文が支拂はれ、之に忍城下の農民や商人が競つて参加したのであります。

一見如何に戰國の習なひとは云へ、城下の良民が之に加つた事はあまりに情誼じやうぎに乏しい様ではあります、それが實は全く反對です。忍の領民には一つ強い信念があつた、忍の人達は水に生れて水に育つてゐる。忍城は水の捌口はけぐち丈け造つておけば決して水では落ちない唯困こまるのは、長い籠城に糧食彈藥が缺乏けつぱうしはしないかと云ふ事です。茲こゝで人夫となつて働き、得たる賃銀ちんぎんと米を城中に運はんだら、城

中はどんなに喜ぶかも知れない。之が最後の御奉公處と、茲に競つて此の勞役に加つたのでした。従つて毎日石田方からくれる米には豆、粟、稗、甚しきは糠を混ぜて一部を食用となし、大部分は賃銀と共に全部を城中に獻金、獻金。

斯くて工事は見る／＼うちに進行したが、進行すればする程城中の糧食彈藥は充實して、之では城は却々落ちません。

堤を築くのは金や米を呉れる三成の爲ではない、全く御領主様の爲だ。嚴重にやつては申譯がない、と云ふのでありますから、其の工事のゾンザイな事全くお話になりません。それでも土臺だけは三成方が心を許す様、手間取つて相當嚴重なものを造り上げました。

それが今日石田堤として、僅に其の形を止めてゐる次第です。

『サア役人が行つてしまつた、一服吸ふべえ、仁助、お前へのやうな馬鹿はねえぞ、あんなに堅く土を押しつけてどうするだア、たゞフワリと土をのせて置いただけでいゝのだ』

『ア、あれか、あれは役人が見てゐたからウン／＼うなつて力を入れてるやうに見せてゐるが、實は腕の方へはちつとも力は入つてゐねえぞ』

『アツハツハツ、そうか、何でも水がついたら直ぐ崩れるやうにして置けばいゝ……オツ役人が來たぞツ、……サア／＼皆一生懸命にやれよ、ヤツソレツ／＼』

『オ、一同、良く働いてくれなア』

『へー皆一生懸命に、此通り汗みずくてす』

『感心々々、追つて御恩賞の御沙汰があるぞ……オ、此所も出来たな……此の個所も大分出来たな、オヤ此所は昨日出来上つてゐたと思つたが、崩れてゐるな』

『そんな事はありますまい？ アレッ崩れてゐる、ハ、ア誰か小便を引つかけたかな』

そんな事で崩れるやうでは、てんで役に立ちません、三成のためには全くの大變な不正工事でありました。

三成程の人物が、尤も三成は元來武將と云ふよりも智將、軍人と

云ふよりも政治家でありましたが、忍の領民と領主の關係を今少し研究してゐたら斯んなへマは踏まなかつたてでありましょう。深く探ると云ふ氣持に缺けてゐた、後年關ヶ原の合戦に失敗したのも、何處かに缺けてゐた處がありはしなかつたか、考へさせられる次第であります。

扱て大堤防はみる／＼うちに出来上り、胸を忍城に押しつけ、左手を伸して荒川を掴み、右手を伸して利根川を握り、此の兩河の水を一氣に堰入れて一舉に龍宮城たらしめんと、水の増すのをひたすら待ちわびてゐた。

一方城中は糧食彈藥は充實したり、寄手は土方工事に、全く吞氣

なものにて、充分な静養と武器の手入れに、時折りは戸板に灰を山と積んでは撒き上げ散らし、恰も軍馬が岡地を走るが如き擬相をこらして、水攻めの功なきを強調、又或る時は夜討ちに、又趣向を變へて沼田に泥鰯をすくひ『アラエツサツサア』と踊りを踊つて、いやもう城中の士氣は益々旺盛でありました。

三成方でも、工事の最中に、火矢を放つて城下を脅し、佐間の天神様の社殿が城と間違つて打ち狙はれ、遂に火を放つて焼失するに至つて居ります。斯くするうちに待ちに待つた大雨は、七月十日の夜より、一天俄にかき曇り、大雨肺然として、篠つく強雨に雷鳴さへ加はつて、物凄い土砂降りとなつて來ました。

本陣に在つて石田三成、忍城の方向を望み、『さしもに堅城を以つて鳴る忍城も、やがては水底に沈むであらう。アナ心地よき事であるわい』。三成はほくそ笑んだのでありましたが、大堤防は前申述べた様な全くの不正工事にて、見る見る濁水がゴウ〜と堤にあふれんとするや、ソレあそこの堤が切れた、ソレこちらの堤が切れた、と逆巻く濁水は一氣に切れ口を目掛けて殺到し、忍城ならで寄手の陣へと物凄く流れ込んで來る。築き上げた計りの新堤が切れたのは之は到底食ひ止め得るものではありません。

『それ水だ、こつちぢやない、あつちへ流れろ』慌てふためいたが一向に『水知らずだよ』とばかり水はおかまひなくグン〜流れて

足を取り腰に迄ひたつて来る。之が本當の『向ふ水』だ。そんなシヤレなんか云つてる場合ぢやない。

『それ陣所を高い處に移せ』『彈藥を水に濡すな』

周章狼狽の眞唯中、時分はよしと許りに、城中よりは、正木丹波守、水に慣れたる手勢を撰つて小舟に打乗り來つて、慌てふためく寄手の第一陣、長束の兵へと突込み來つて、當るを幸ひ、四角八面に斬つて廻る。其の強き事雷の如く、早き事稻妻の如く、慘々に敵を惱す。

『ワアー、水難と劍難が、一緒に來た』

石田方は水に溺るゝ者、殺される者、傷つく者數知れず、全く慘

々の態たらくてありました。

折から城中より聞へる引き鐘の音に、正木丹波守は手勢を纏めてサツと引上る。其の整然たる事、到底人間業とは思はれず、漸くに立直つた寄手の陣は、『ソレ城兵が引上ぐるぞ。追討して皆殺しにせよ』と、加勢に來つた石田の兵と合體してドツと許りに追撃したが引上るは勝手知つたる土地の者、追ふは土地不案内の事とて、却つて水量の増した沼田や深田に落込み、動きもならず、後から後からとそれを押しつけ、水に命を落す者數知れず。

それから數日、水は程なく引いたが、道路は淤泥で一杯、進むもならず、已むなく遠卷に圍んで、三成の忍城水攻めは完全なる失敗

てありました。

昔の戦争は呑気なものです。此の戦の眞最中に誰だか知らないが石田の陣中に次の様な落首をする者がありました。

(一) 長束(榮漬)をば、深田に漬けて其の上に、石田を乗せて忍(押し)の強さよ。

(二) 計略は密なり(三成)、如何に攻むるとも、押し(忍)の一手で石田崩るゝ。

斯くて三成の忍城水攻めは大失敗となりましたが、三成が敵の領民に賦役として與へ、支拂つた賃銀は相當以上のものであり、之は三成の人格の現れて、敵ながら天晴な事であります。今度の事變下

に皇軍が支那の民衆を使役して、橋の落ちたのを修理し、レールを直す等に相當以上の賃銀を支拂つてゐる。此の皇軍の精神が、三百年以前の三成にあつた事は當然と云へば云へるが、何だが一寸美しい氣持に打たれます。

兎に角三成の忍城攻めは、歴史家がつと／＼高く評價し、もつと深く研究されてもよからうと痛感される次第であります。

扱て三成忍攻めの失敗を小田原に在つて聞いた秀吉は愕然として色を失ひ『タカの知れたる忍の小城、只一と掴みに押崩して』と思つたのが案に相違して此の始末、今三成を呼び戻しては『關東一圓に忍城強し、流石の秀吉も諦めた』と思はれると、今後の威信に係



る、と云つて改めて大軍を向けるには周圍の事情が許さない。思案の末降伏を奨める手段を探る事になり、幸ひ城主成田氏長は小田原城にあり、誰か氏長と面識の者は無きかと探した處、山中山城守長俊が古くから連歌の友と云ふ事が判り、長俊から

『小田原の落城も目前に迫つた。關東の情勢も既に定つてゐる。忍が如何に固守しても所詮は無援の裸城にて、涸魚の運命は知れたものである。此の際徒らに双方傷くは國家のため損失大なるものあり、必ず悪しくは計らはぬ故、この際關白閣下に御同意遊されては如何』

氏長も秀吉から禮を以つての勸告に『宜しい、戦ては敗けないが此の非常時に双方人命を傷ける事、國家のために取らざる處なれば早く城を明け渡さう』と直ちに自分の留守を預る肥前守に使を以つて此の趣を傳へる事になつた。

城中は士氣益々旺盛にて、此の上は四五十日堪へる餘裕は充分にあつたが、主人より之以上無益の戦争を罷めよと云はれてはそれ迄であり、加へて肥前守は老病にて、籠城して居つたのでは充分の醫藥も與へる事が出来ない、衆議は城明け渡しと決つたが『さりとて此の儘敵に城を渡すのはいかにも残念、一つ上方勢をアツと云はせ荒膽をひしいて、忍の武士の最後をモウ一度見せてから開城しよう』と一決し、三成の許へ『主命もだし難く城は明け渡すが、城中

取片附掃除萬端の事も有之故、開城の日は改めて申入る。但し明日雑人輩を百人程立退かせる、左様御承知ありたし」と申入れ、扱て翌日雑人體の者、箕笠着用品糧のツトを腰に痛々しき姿にて連れ立ち、陣所に下つて参りました。

『コレ〜汝等は何れに行くのか』

『何處に行くかつて？ それは當方で聞きたい位のものだ。我々は家は焼かれ、田畑は荒され、別に行くべき處とてない』

『成る程、そんなら暫く我々の陣にゐて、小者の手傳ひでもするがよい。やがて御主人の計ひにて、各々其の業に安んずる様、計つて取らすであらう』

扱ても哀れな者達である、と一同は心を許し、各陣に雑人輩を割り當てる事にしました。

忍城も今迄散々我々を手コズラしたが、兩三日中には開城だ。まあ〜之で漸くホツと息がつけると云ふものだ、と數萬の將卒は鎧甲を脱ぎ、其の夜は酒宴に十二分に寛ろいだのでありました。

七月二十五日の夜は更けて、焚火も淡く、出水の跡とて虫の聲さへ無く、長らくの戦に身も心も疲れ果てたる寄手の將卒は、全く油斷して前後不覺の寝入りばな、亥の刻より、サツと吹き出した風は次第に強烈となつて、旗を倒し、陣幕を裂き、ビュー〜と物凄なものになつて参りました。假寢の夢を破られた將卒

『エライ風になつて来たな』

寝ぼけ眼をこすつて、首を縮めてゐた折しも、小荷駄を司る太山伯耆の陣よりメラ／＼と燃へ上る火の手『ソレ火事だ』と云ふ間も無く火薬へても火の手が廻つたらしい、ダダンバチ／＼ダダンダンと物凄い事になつて参りました。

折しも此の強風に猛火の眞唯中より、何處から入つたか、一團の武者百餘人『天兵降つて暴戻なる寄手の大将、三成の首を頂戴せん三成は何れにあるや……』と鬨の聲を上げて、面もふらず關東方の陣所に斬り込み、當るを幸ひ、斬り倒し、薙ぎ伏し、八方四面にあばれ廻つた。

『ウアー、今度は火難に劍難だよ』

慌て、鎧を付ける暇も無く、素裸に太刀を持つ者あり、脛當を頭につける者あり、漸く鎧甲に身を固め、馬に乗る事が出来たが、馬は一向に動かうともしない。よく見ると未だ手綱が木にゆはへたなりてあり、やつとの思ひで之を外したら、今度は馬に首がない許りか、後へ後へと下つて行く。こんな事は無い筈だと、ヨク／＼見ると馬にあべこべに乗つてゐたなど、陣中の混亂其の極に達して慘々の態たらくてありました。

縦横無盡に狼籍の限りを盡した一團は、時分はよしと忽然として風の如くに消へ去つて了りました。

陣中は呆氣にとられ、さてはかの雜人輩の仕業ではないかと詮議して見た處、これもいつしか消へ失せて影も形も見へない。

三成烈火の如く怒り、翌朝家臣柏原彦右衛門をして城外に立たしめ大音にて『ヤア〜城中に物申し入れん。昨日申越された使者の口上には主命もだし難く既に城を明渡すと申されながら、此の方の油斷を見濟し、昨夜の仕儀は何事なり。武士にあるまじき卑怯の振舞、申開きあらば承はらん』

『コハ思ひも寄らざる御掛合かな。當城は主人下總守の命により、明日にも開城致す手筈にて、其の準備中なり。昨夜寄手の陣に何事ありしか當方一向に存じ申さず。然るに只今各々方斯く大勢にて押

し寄せ來ること奇怪なり。降りし城を攻めよとは大閣殿下の御誕なるか。御所望とあらば今一戰我等の手並み御目にかけん。それ共恥を知り、義を重んじ、此の儘引上るやいかた、サア〜〜〜』  
掛合つては見たもの、三成方に證據とてなく、道理につまつてスゴ〜と引返すより他はありません。

石田方は軍議を開いてどうしたものかと相計つた席上、眞田安房守昌幸の次男與三郎幸村、未だ二十餘年の若武者ながら進み出て、『古老の御歴々おはします故、差控へて罷り在つたが、我に多少の心算あり、宜敷御任せあつて城中に差遣されたし』と申出て、直に鎧を脱いで小刀許りの肩衣袴となり、成田家菩提寺龍淵寺の僧と共に

に唯二人城中に赴き、辯舌を以つて

三〇

『北條家のため、後々の事を考へて屈する成田氏長、尺取虫は伸びんが爲め屈するのである、御主人下總守殿の深慮遠謀の程方々には御考へ及びあるや如何に』  
と納得せしめ、遂に中一日おいて淺野彈正長政が城受取りと事きまりました。

此の時長政、斯く開城するからには、一騎一駄にて城を出られよ、と申出した處が、城中又も烈火の如く怒り、

『我々は力盡き降伏するものでない。只主命により已むなく城と別れるのだ。城を立退けば明日にも直ぐ浪人である、親を養ひ、妻子を食せんければならぬ。それに一騎一駄とは何事なるぞ。我々を恥しめ殺さんとするのか。同じ死する命なら、城を枕に打死して、武士の面目を保たんのみ。さらば今ひと合戦目に物見しようずるものを』

『判つた〜。どうぞもう御自由に、よろしい様に御引取を願ひたい』

丁度悪い店子に出合つた家主の態よろしくでありました。  
愈々運命定まつて開城と云ふ場合に立至つても、尙ほ名譽の前には最後の一戦をも辭せない意氣、關東一の名城と共に忍人士のほこるべき價值が此の邊にあらうと考へさせられる處であります。

斯くて忍城は遂に開城、成田氏長は野州鳥山の城に移され、同年八月一日家康入國と共に松平家忠の所領となり、松平忠吉、酒井忠勝、松平信綱を経て寛永十六年阿部豊後守五萬石で封ぜられ九世八十五年、文政六年伊勢桑名より松平下總守忠堯國替となつて十萬石、徳川時代御家門大名と稱へられ溜りの間詰め六軒衆、後松平越中守を加へて七軒衆の御家柄にて、五世四十七年明治維新と相成り當代子爵松平忠壽閣下には、貴族院議員として御活躍です。

其の間忍城水攻めより三百年、戦國時代の擾亂に次ぐるに頻繁に行はれた國替政策、昔日のあたり勇士、名家の墳墓もいつの間にか詣ずる者は斷へ、無縁となつて了ひました。恐らく其の中には、今

日忍町の盛大を來してゐる行田足袋、之は其の昔忍城の武士が手内職として始めたものでありますから、今日忍町の繁榮を外に、其の創立者の墓石が雑草のほこるにまかせ朽ち果てゝゐる、已むを得ないと云へばそれ迄であります。誠に物の哀れを感じない譯には行きません。

時に忍町在住に大澤新兵衛翁あり「斯る英靈いづくにか安んずる處あらん」と嘆かれ、過ぐる年無縁塔を建立して多年泉下に世の無情をかこつてゐた無縁の精靈を永劫に弔慰することになりました。

其の後子息の龍次郎氏、父の遺志を繼いで昭和六年の秋彼岸、之等無縁の墓石千有餘を一大鐘形に積上げ、其の頂に御丈一丈あらた

かなる延命地藏尊を守護神として奉安、小田原道了尊山主大石觀法  
 老師の御命名て行田新兵衛地藏尊、無縁塚と共に今や關東第二靈場  
 其の名は高く、毎月八日の御縁日には、遠近よりの諸參詣、昔日の  
 英靈慰安の香煙斷へ間無く、過ぐる昭和十一年の十二月には、此の  
 無縁塚中より南朝の忠臣大楠公後裔の墓石が発見されて(濑川神社社務所  
 發行「菊水」藤  
田精一博士  
 寄稿参照)靈験一段とあらたかに、之が奇縁となつて大楠公首塚の物  
がた語り(熊谷市林有章  
 先生の御研究)となりませんが、之は後日に譲つて忍城の水攻と題し  
 行田新兵衛地藏尊の由來記に及ぶ新講談、一席の讀切りと致します

— 終り —

た

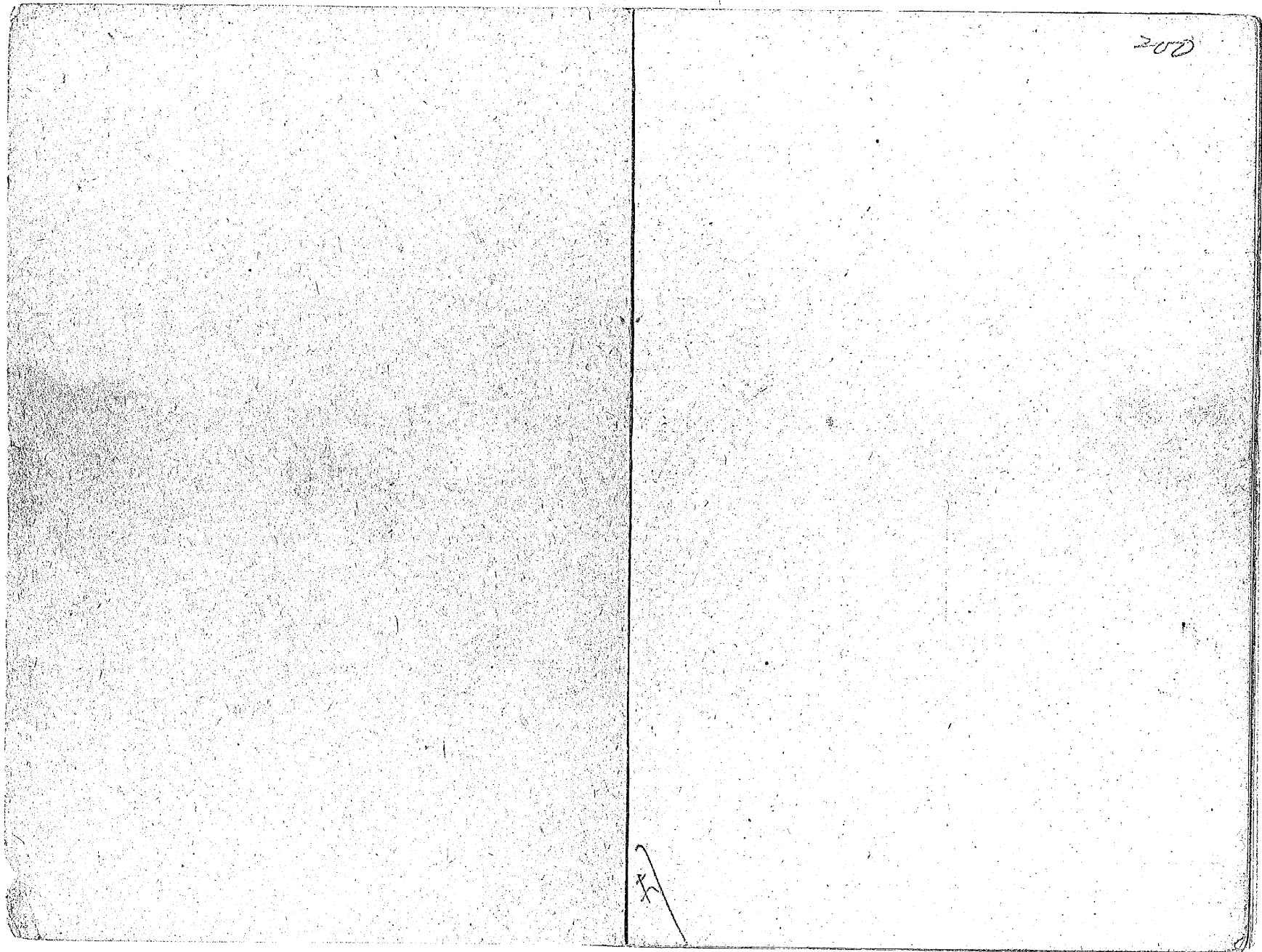
昭和十五年九月廿八日印刷發行

(非賣品)

埼玉縣浦和市本太四五六

編輯發行 大澤次郎

1402



200

7





埼玉県立図書館



31015004